

ナチュラルキス

目次

ナチュラルキス

母はなんでもお見通し？

ナチュラルキス

「この季節に、冷たい飲み物が飲みたくなるなんて……笑っちゃうね」

「リンクゴジュースを自販機から取り出した榎原沙帆子は、そう言いながらすでに飲み物を手にしている友達ふたりを振り返った。

よい天気だった。二月とは思えないほど春めいている。自販機が設置されているこの外通路には、暖かな日差しが降り注ぎ、制服のブレザーすら、脱ぎたくなるくらいだった。

「天気もいいし、このまま外で過ごさない？」

そう提案してきたのは、飯沢千里だ。彼女は沙帆子たち仲良し三人組のリーダーのような存在だ。行動的な彼女は、ここ龍華高校の生徒会で書記をしていて、ハキハキとものを言う子だ。肩くら今までの髪はサラサラで、沙帆子よりも十センチは背が高く、見た目はボーグシユな感じだけど、すつごい美人。

「いいねえ。どこに行く？ ベンチのある場所はつと……」

クリクリの巻き毛ヘアの江藤詩織は、くるんど一回転しながら周囲を見回した。丸顔の詩織は鼻がちっちゃくて、ほっぺたも唇もふくらしてて。愛らしいという表現がぴったりの子だ。

「どうやら、どこのベンチも満員のようだよ。さすがに地面に直接座れる季節じゃないしねえ。千

里、どうする？」

「いい場所知ってるよ。ちょっと歩くけど。こっち、行こう」

千里はふたりを従えて、早足で歩き出した。

沙帆子は、まだ開けていないリンクゴジュースのパックを振りながら、千里のあとについていった。

「あそこ、あそこ。ほら、やつぱり誰もいない」

胸を反らした千里は、勝ち誇ったように言った。

見ると、確かに垣根沿いにベンチが二つ並んでいる。

「こんなとこに、ベンチなんかあつたんだね」

詩織が意外そうに言つた。「ほんと」と答えた沙帆子は、喉にかすかな違和感を覚え、コホツと小さな咳をした。三人は並んでベンチに座つた。沙帆子は、ジュースのパックに貼り付けてあるストローを取つて差し込んだ。

「わたしら、教室からずいぶん離れた場所に来ちゃつたもんだね」

ミルクココアを口に含み、周りを見回した詩織は、千里と沙帆子に目を向けて言つた。

「うん。時間、ちゃんと確かめてないと……。話に熱中してたらまずいことになるな」

ウーロン茶を手にしている千里が、どうしてかにやつきながら言つた。なんだか知らないが、ず

いぶんと意味ありげだ。首を傾げつつも沙帆子は携帯を取り出し、いま何時なのか確認した。

「わたし、そくならないように時間見とくね。でもここ、いい場所だね。誰もいなくて……コホツ」

「どうしたの？」沙帆子つてば、咳しちゃって。風邪？」

「……わかんない。なんだか急に……喉、おかしくて、コホッ。どうしたのかな？」

「埃ほこりでも吸い込んじゃつたんじゃない？」

「うん、そうかも……もう大丈夫みたい」

「バレンタインもうすぐだね。ふたりとも、チョコの準備した?」

千里が言い、詩織はバレンタインの単語にすぐさま食いついた。

「したした。彼チョコに義理チョコ、友チョコ、パパチョコ」

指を折りながら、コミカルな振りまでつけてリズムよく言う詩織の様子は、ずいぶんと愉快だった。

「そんなんに？　お金かかりすぎじゃないの？」

千里はいくぶん呆れ気味に言った。

「パパチョコでご機嫌取つて、来月、がつちり元取るから大丈夫」

そんなことを言いながら、する賢そうな表情をしている詩織に、沙帆子は吹き出した。

「詩織のパパ、あんたに甘いもんね。けど本命は、チョコだけじゃすまないし、やっぱ大変だよね」

「そうそう、彼氏持ちは大変だよ」

ふたりの発言に、沙帆子は唇を突き出した。

千里と詩織には彼氏がいる。いないのは沙帆子だけ……

「そういうの、すつごい贅沢ぜいたくな発言よ」

沙帆子は抗議するように言つた。好きな相手と相思相愛なんて、羨うらやましいつたらない。

「だから、沙帆子も早く彼氏を作ればいいのよ」

千里の言葉に、詩織は頷きながら身を乗り出してきた。

「そうだよお、そしたらトリップルデートできるしさ」

沙帆子は少し身を引いた。この話題になると、ふたりはしつこいのだ。

「沙帆子はガードが固すぎるんだよ。わたしらまだ高二なんだよ。軽い気持ちで付き合っちゃえ

ばいいんだよ。合わないなと思つたら別れりゃいいの」

「そんなんの……いいのかな？」

控えめながらも、沙帆子は反論を込めて詩織に言つた。彼女はとてもそういう気持ちにはなれない。わたしも詩織に賛成よ。沙帆子はいろんな面で消極的すぎる。尻込みせずに、もっと積極的に経験すべきじゃないかと思うな

消極的というのは本当のことだ。沙帆子は千里に何も言い返せず、黙り込んだ。

「先週、三年の先輩に告られたのに、即、断つちゃってさ。……あれはちょっとつたいなかつたかもね。あの先輩、親がおつきな病院経営してて、医学部合格間違いなしつて話だよ。まあ、顔はそこそこつて程度だつたけど」

沙帆子は千里に精一杯凄すごんだ目を向けたが、愉快そうな笑みが返つてきただけだつた。

「だつて、あのひとのこと、わたし何も知らないし……好きとかつて気持ちがないのに付き合つた

り……」

「でも、わたしは付き合つたよ！」

沙帆子の言葉に詩織が強い調子で口を挟んできて、彼女は驚いて言葉を止めた。

「別に最初は好きとか思つてなかつたけど……。でもいまはどつても好きだもん」

気まずい空気が流れた。

ピリピリした空気を発している詩織に、沙帆子は口にしてしまった言葉を悔やんで唇を噛んだ。

そういうつもりではなかつたのに……

「まあまあ、恋愛事情は色々だよ。あとから愛情が湧く場合もあるつてことよ」

千里がとりなすように間に入ってきた。

「でも詩織、そんな風に突つかかるようなものの言い方、良くないよ」

「ご、ごめん」

そう口にしたもの、詩織はまだ不服なようだ。

「わたしも……あの、ごめん」

沙帆子は詩織に小声で謝った。

「あのさ、こんな人気のないところまでわざわざやつてきたのは、恋愛談議で採めるためじゃないわけよ」

「なに千里、あんた、何か話があつてここに來たつての？」

詩織の問いに、千里はにんまりしながら頷いた。

「うん。実はさ、おふたりともよくご存知の、生徒会の副会長の広澤脩平ひろさわ しゅうへい」

「広澤君？ あの人気者がどうかしたの？」

「なんかさあ、彼、沙帆子に氣があるみたいなんだな」

にやにや笑いつきの、千里の思わずぶりな発言に、沙帆子は飲み込んだリングジュースでむせそうになつた。

「へ、へーつ。沙帆子、やつたじやん。すごいじやん。千里、そいで、そいで？」

「うん。この間ね、たまたま生徒会室でふたりきりになつたの。そしたら広澤君、榎原さん、彼氏いるのかな？ つて」

「おおーつ」

詩織は大袈裟なほど驚いた声を上げた。沙帆子は、話のなりゆきに目を白黒させた。

「わたしがないって言つたら、広澤君、そうかつて、やたらほつとした顔をしながら言うの」

「来たね、来たねえ」

何が来たのかわからないが、詩織は来たねを繰り返し、最後に猛獣のように「うおーつ！」と雄お叫びを上げた。

「広澤君、沙帆子に告白するつもりかな？」

「それがね、自分にチョコくれる気がないか、沙帆子に聞いてくれつて、冗談まじりに頼まれたのよ」

「えつ？」

思わず声を上げ、沙帆子は目をぱちくりさせた。

「それつて、沙帆子がチョコあげたら、広澤君に對して付き合いをオッケーしたつてことになるわ

け？」

千里は詩織の言葉に「そういうこと」と頷いた。

「ふーん。考えたね、広澤君」

「あの……それって、ただの冗談なんじゃない？」

「沙帆子つてば、いま千里に言われたばつかなのに、消極的なものの取り方してえ。これはもう渡すつきやないよ」

詩織はひとりで盛り上がり、沙帆子の肩をばんばん叩いてきた。

「し、詩織、痛いってば」

「それじゃあさ、今日の放課後、沙帆子が広澤君に渡すバレンタインの本命チョコ買いに行こうよ」「そうね。そうしよ。広澤君は甘いもの好きだし……まあ、どんなチョコでも沙帆子からなら、喜んで受け取るだろうけど」

「ちよっと待って、わたしは……」

「沙帆子、広澤君が嫌いなの？」

千里に真顔で聞かれ、沙帆子は顔をしかめた。

「き、嫌いってことはないけど……」

「ほらね。ならないじyan」

「詩織、そういうことじやなくて……」

「あのさ、小難しく考えないで、千里から、わたしからのチョコ欲しいって聞いたんで、あ、げ、ま、

すつとかつて、にこつと笑つて渡せばいいのよ」

「そうそう、チョコ渡すだけでいいのよ。好きですなんて言う必要ないし。それでうまくゆくから」

沙帆子は、詩織と千里を見て眉をひそめた。

どうもこのふたり、沙帆子が広澤のことを好きだと思い込んでいる気がする。

「あのね、わたしは……」

「沙帆子」

沙帆子は千里に肩を掴まれて言葉を止めた。

「広澤君はいいやつだよ。わたしが保証する。付き合つたからって無理やりキスするようなやつじやないと……まあ、思うし……。一枚目で目の保養にもなる。知的で、退屈なおしゃべりするような野暮なタイプじゃないしね」

千里はまるで広澤の宣伝マンのように、彼のアピールポイントを並べ立てた。
なんと言つて断ればいいのか考えていた沙帆子は、また突然咳^{せき}込んだ。

空気の中に漂う匂いに、彼女は咳の原因にやつと気づいた。

「煙草……？」

沙帆子の呟きに、詩織が反応した。

「咳の原因。煙草みたい……」

どこかこの近くで、誰かが煙草を吸つているのだろう。

「えっ？」

沙帆子は煙草の煙が、大の苦手なのだ。ひどいときは吐き気までするし、實際耐え切れずに嘔吐したことさえある。たぶん、体質的に合わないのだろう。

「ああ。煙草……」

生垣のほうを見回しながら千里は言い、沙帆子の顔を覗き込んできた。

「大丈夫？ 吐き気とかしてない？」

「うん。大丈夫。室内じゃないから」

「ある意味すごいよね。沙帆子って、ちょっと離れた場所で吸ってるひとがいるだけで、咳き込んでやうなんだもんね」

詩織から感心したように言われ、沙帆子は顔をしかめた。

「なんか吸ってるひとに悪くて、咳き込みたくないんだけど……」

「ねえ、そろそろ戻る。五時間目始まっちゃう」

千里の言葉に沙帆子は頷いて立ち上がり、ふたりとともに教室に向かつて歩き出した。

2 爆弾発言

「垣根の向こう側で、男子生徒が隠れて吸つてたのかな？」

教室のある棟に入り、廊下を歩きながら詩織が言った。

「そうかもしないけど……先生じゃないのかな？」

千里が考え考え□にした。

その言葉に、沙帆子はどきりとした。そういうえば先ほどの場所……？

「もしかすると、佐原先生だつたりして。あの背の高い垣根のせいによくわからなかつたけど……化学室、あのあたりじやなかつたっけ？ そうだつたんならわたし、全部煙吸い込んでも良かつたかもお」

「この彼氏持ちがつ、何言つてんだか」

詩織は千里にパシンと背中を叩かれた。

「い、いたいって。だつてえ、佐原先生、超かつこいいじやん。あの先生に告られたらあ……つてあるわけないね」

突然、夢から醒めたように、詩織は現実的に言つた。

沙帆子の胸が小さくしぶんだ。

「佐原先生ねえ」

くすくす笑いながら千里が言い、そして続けた。

「あの先生じや、大人すぎるよね。あの冷静……というより、冷淡な雰囲気？」

千里は詩織に、同意を求めるように振り向いた。

「でもさ、佐原先生、たまに微笑むときあるじやん。ありや、乙女心には犯罪だと思うよ」

沙帆子は、詩織が表現したとおりの佐原の笑みを思い出した。

胸の中で沙帆子の恋心が、キューンと切なく鳴き声を上げた。

「学校の先生なんかやらずに、モデルにでもなればいいのに。よっぽど稼げるよね」

千里の言葉を聞いた沙帆子は、胸の内でため息をついた。

佐原啓史は、化学の教諭だ。そして沙帆子たちのクラスの副担任でもある。

ものすごく背の高い先生で、それほど背が高い沙帆子の背は、佐原の肩ほどもない。

沙帆子は、その高嶺の花に、実るはずもない恋をしている。

おまけに佐原は、彼女にとつて天敵ともいえる煙草を吸う。

「それじゃあさあ、放課後、バレンタインチョコ買いに行こうね」

詩織の念を押すような言葉に、沙帆子は慌てた。

「えっ。あの、わたし」

「沙帆子、思い切りつてやつが大事だよ。淡々と生活してたって、なんの波もなくてつまんないじやん」

「詩織、あんたにしちゃ、ずいぶんと人生を語るじやん」

にやにや笑いながら詩織をからかった千里は、沙帆子に向き直った。

「わたしも、沙帆子は今回のこと、思い切つて正解だと思う。人生は自分で色をつけて楽しくするべきなのよ」

「だよね、だよね」

沙帆子は、本人を抜きにして楽しげに語り合っている友に疲れた目を向けた。

彼女はいつでも、このふたりのパワーに押されっぱなしだ。

まあ、ふたりにくつついて、ドタバタするのは楽しかったりするのだが……

けど、今回ることは……恋をしているわけでもない相手にチョコを渡すなんて……

沙帆子は諦めを感じつつ、盛り上がっているふたりを見つめた。

「ママ、ただいま」

「沙帆子、おつかえりい」

ドアを開けてくれた母親の芙美子は、いつものように元気に声をかけてきた。

「着替えて手を洗つて、早くいらっしゃい。今日のおやつはバタークッキー。美味しく焼けてるわよ」

「うん」

素直に返事をしつつドアノブに手をかけて、自分の部屋に入ろうとした沙帆子は、母に腕を掴まれ足を止めた。

「ママ、何？」

「沙帆子、それってチョコよね？」

母の質問に、沙帆子は自分が手にしている紙袋に視線を当て、「あ、うん」と答えた。

「な、何。沙帆子、パパのも、千里ちゃんや詩織ちゃんにあげるふんも、ふたりで一緒に作つたし……それつて？」

「そ、そういうんじゃないの。千里と詩織が勘違いしてて……買うことになつちやつただけ」

「勘違い？」

「う、うん。勘違いなんだけど、好きなんだって思われちゃったみたいで……渡せつてあんまりうるさくて。まあ買つちやつたっていうか……」

沙帆子は掴んでいるドアノブを左右に回しながら歯切れ悪く答えた。

「いいんじゃない」

「えっ？ 何が？」

「渡してみたらいいんじゃないかなって、ママも思うわ」

そう口にした美美子は、沙帆子の返事を聞くことなく、居間に入つていった。

どうやら母まで勘違いさせたようだ。別に広澤のことを好きなわけではないのに……みんな……

沙帆子は顔をしかめて部屋に入り、鞄を所定の位置に置くと、小さくて派手な紙袋を机の上に置いて、じつと見つめた。

彼女がチョコを渡したい相手は、広澤ではない。おこがましいことだらうが、佐原先生なのだ。着替えをすべきだが、なんだかひどく疲れを感じ、彼女はベッドに腰かけた。

恋をしているわけでもない広澤に渡すなんて……やはりありえない。

沙帆子は後ろにパタンと倒れて、天井を見上げた。

佐原先生……

先生のことを考へると、なんでこんなに苦しいんだろう？
なんでこんなに好きになつちやつたんだろう？

実るはずのない恋など……さつさと手放したほうがいいのに……

沙帆子はただの生徒で、佐原は教師……相手になどされるはずがない。

なにより、あの大人な佐原に、恋人がいないはずはないし……

胸がズキリと痛んだ。信じられないことに、涙まで湧き上がりつてくる……

彼女はぎゅっと目を閉じた。瞼から涙が転げ落ちる。

広澤にチョコを渡して、付き合えば……佐原を忘れられるだろうか？

詩織のように、付き合い始めたら、広澤に対する恋心が生まれるのだろうか？

遠くの親戚より近くの他人というし……

それに広澤のことは別に嫌いなわけじゃない。見た目だけじゃなく、彼は性格も良い。むしろ好感が持てるひとだ。ならば、期待できるのではないだろうか？

佐原のことを忘れられるかも……忘れるのは無理としても、この辛いばかりの恋心も少しは薄れるかもしれない。

大きく息を吐き出した沙帆子は、目を開けてベッドから起き上がり、着替えを始めた。

決めた！ 広澤にチョコを渡そう。

「実は、仕事の都合で引っ越すことになった」

両親とともに夕食を食べているところで、その爆弾発言は沙帆子に向かつて飛んできた。

「へつ？ う、嘘つ！」

目玉が飛び出しそうなほど驚いた。寝耳に水だ。なんの前ぶれもなく、引越し〜？
「それが本当なんだ。観光地で賑やかなところだぞ。いい源泉の温泉もあるらしいし。休日は、気軽にあちこち遊びに行けるぞ」

父は気楽そうに、それも楽しげに語った。隣に座っている母も、キラキラと瞳を輝かせている。

「ちょっと待って、パパ。源泉の温泉で観光地つて、それって遠いの？」

「そうだな。ここからだと、高速で二時間くらいかかるかな？」

「わ、わたしは？ わたしはここにいていいんでしょう？」

沙帆子の言い分に、母は呆れたよう首を振った。

「いいわけないじやない。このアパートは引き払うわよ。もち、沙帆子も、わたしたちと一緒に行くのよ」

「だつて、わたし、高校……」

「心配するな。あつちにも高校くらいあるさ」

「だつて、高校つて、そう簡単に転校できないよ」

「できるさ。なあ、芙美子ちゃん」

「世の中、不可能なことなんてないわよ」

母のいつもの決まり文句に、沙帆子は苛立ちを感じた。可能とか不可能とかの問題ではない。

「彼氏がいるとかいうなら、引き離すのも可哀想だけど……沙帆子、そういうひと、いた？」

母は娘を見つめ、小バカにしたようにふつと笑った。

沙帆子はぐつと詰まつた。

「わたしなんて、沙帆子の歳には、もう幸弘さんと付き合つてたのに。ねつ、幸弘さん？」

「またその話か……」

沙帆子の母は、自分の隣に腰かけている父の腕に手を触れて、にっこり笑つて見上げた。そして父は、そんな母を嬉しげに見つめ返す。

「ゲロッ！」

両親の目も当てられないいやつきように、沙帆子は胸の内で吐いた。

「あの頃の芙美子ちゃんは、初々しくて可愛かったなあ」

父のにやけた顔……見上げる母の潤んだ瞳……

いつものように、ふたりの世界に入つてしまつたようだつた。いまや、両親の意識に娘はいまい。

「やーだあ。もう、幸弘さんつてばあ」

「いいだろ。僕ら、夫婦なんだから」

「ねえ、幸弘さん。温泉つて夫婦一緒に入れるところもあるのかしら？」

横目で盗み見ると、母は父の手の甲に、くるくるとの字を描いている。

「ゲハツ！」

沙帆子は世間様への恥ずかしさに囚われ、顔を赤くして目を逸らした。

「そりゃあ、あると思うよ。そうだ、芙美子ちゃん、ネットで検索してみようか？」

「賛成！」

領き合つた両親は、ささつとご飯を食べ終わり、ふたり一緒に立ち上がつた。そして手を繋いで食卓を離れてゆく。

「ママ、こここの片付けは？」

「沙帆子やつといて。その代わり、あなたの高校も、ちゃーんと探しといて、あ、げ、る、か、らあ」まるで恩に着せるように言われて、沙帆子はむつとした。

「引越し先の家も、探さないといけないな」

「幸弘さん、それはやつぱり、実際に行つて探さないと駄目よ」

「そうだな。それじや、今度の土日にふたりで行つてこようか？」

「ふ、ふたりで……？」

「賛成！」

母が明るく叫び、ふたりは笑い声を合わせながらいなくなつた。
「わ、わたしは？」

パタンとドアが閉じ、沙帆子は両親に向けて伸ばした手を、ゆっくりと下ろした。
彼女は何かに縋るようすが、天井を見つめた。

「わたしつて、可哀想すぎないかあ？」

答える声はなく、沙帆子の言葉は虚しく部屋に響いただけだつた。

引越しだなんて……

沙帆子は胸がつぶれた。

佐原先生の姿……もう一度と見られなくなる。……逢えなくなるのだ……
「うくーっ」

沙帆子は絶望に唇を歪め、湧き上がる涙を拭つた。

3 行き先を失くしたチョコ

バレンタインデーを迎えたその日は天氣も上々、あちこちでチョコの香りが漂う学園内は桃色の空気に包まれているかのようだつた。だが、沙帆子の心は鉛のように重かつた。

「沙帆子、おはよう」

教室の中に入ると、千里が手を上げて沙帆子を呼んだ。

一緒に詩織もいて、沙帆子がふたりの前に行くと、潜めた声ながら勢いよく話を切り出してきた。

「ちゃんと持つてきた？ 昼休みに渡す？ それとも放課後？」

「え……あ……うん」

「もうっ、そんな風に臆病でどうするの？」

詩織が叱るように言つた。

なぜ沙帆子が元気がないのか、彼女たちは本当のところを知らないのだから仕方がない。昨日、何度も話そうとしたのだが、口にしたら泣きそうで、どうにも話せなかつたのだ。

重い口を開き、沙帆子はふたりに引越しのことを話そうとした。けれど、やつぱり声が喉に引っかかったようで、言葉が出てこない。

「いまから緊張してどうするのよ。はいはい、リラックス、リラックス」

「う、うん」

切ない思いをコクリと飲み込み、沙帆子は無理やり笑みを浮かべた。

昼休み、沙帆子はお弁当を食べたあと、ひとりで生徒会室に向かつていた。

そこに広澤はいるはずだと千里が言い、強引に教室から送り出されたのだ。

千里と詩織もチヨコを持ち、今頃それぞれの彼氏に会いに行っているはずだ。

広澤にチヨコを渡すと一度は決めたものの、いまになつてためらいが強くなつてきていた。

それでいて、もうどうにでもなれという破れかぶれの気持ちにもなる。

どうせ来月には引越ししなきやならないのだ。佐原ともお別れ……もう逢うことなくなる。

広澤には、チヨコを渡すとしても、すぐに引っ越すのだと話そう。

沙帆子は廊下の分かれ道でびたりと立ち止まつた。

左に曲がると生徒会室へと続く階段。

右に曲がると化学室へと行ける。

そうだ。どうせ引っ越すのだ。同じ破れかぶれになるのなら、思い切つて佐原にこのチヨコを渡そうか……

佐原は、誰からのチヨコも絶対に受け取らないと噂で聞いているが、引っ越すのだと言つたら、同情して受け取るくらいしてくれるかも。

沙帆子は自分の本能に操^{あや}られるようにして、右へと曲がつた。

佐原はいるだろうか？

チヨコを持つた女生徒や女性教諭に、囲まれているのではないだろうか？

その想像は半分当たっていた。化学室の隣にある佐原専用の部屋の前には、たくさんの女生徒が集まつていた。だが、佐原自身の姿は見えない。どうやら、佐原が戻つてくるのを、みんなして待つていていた。

やつぱり駄目だ。とてもあの中に交じる勇気はない。

沙帆子は回れ右をし、もとの場所へ戻ると、階段を見上げてため息をついてから、足を踏み出した。

三階まで意氣消沈しながら階段を上り、彼女はとぼとぼと生徒会室へと向かつて歩いた。

生徒会室のドアは開けっぱなしになつていた。ドアに近づくと、中から小さな笑い声を含んだ楽しげな会話が聞こえてきた。

「好み似てるね」

広澤の声だ。

「ほんと、びっくり。よければ今度、CD持つべきましようか？」

「嬉しいな。頼むよ。それにしても、用事で顔出したばかりに、僕の仕事の手伝いをさせてしま

つて、申し訳なかつたな」

沙帆子はそつと中を窺おうと、開いたドアへと首を伸ばした。女生徒が一緒にいるのでは、目的が目的だけに中に入りづらい。

「いいんです。あ……あの広澤先輩」

「何?」

「これ。もらつてくださいませんか?」

必死な声……

ドアからそつと覗くと、窓際でチョコを差し出している女生徒が見え、驚いた彼女は息を止めて首を引っ込めた。手渡したのは……震える声からして、間違いなく本気のチョコ……

「あ……どうもありがとう」

驚きのまじつた叫びのあと、広澤の真面目そうな声が続いた。

広澤君、あの子のチョコ……受け取つたの?

「先輩つ。嬉しい」

「わっ!」

その声と同時に発したぼすつという音……

見なくともわかる、女の子が広澤に抱きついたのだ。沙帆子はすぐさま回れ右をし、その場から急いで離れた。

どうやら沙帆子のチョコの行き先は、なくなつてしまつたようだつた。

笑いが込み上げた。ほつともした。これで良かつたのだと思えた。
チョコを手渡せたのなら、もしかして、詩織のように、恋へと発展したかもしれない。だが、そ
の可能性は消えてしまつた。

階段を下りていた沙帆子は、じつとと考え込み、手すりを掴んで踏み出した足を宙で止めた。
もし、もしも、チョコを受け取るところを目指したのが広澤でなく、佐原だつたら……
そう考えただけで、胸が焼けつくように痛んだ。

これで良かつたのだ。彼女が恋をしている相手は佐原だけ……

たとえ実らなくとも……

沙帆子は手に握り締めていたチョコをポケットに入れ、急いで教室に戻つた。

「沙帆子」

教室の中にいたのは千里と、数人の生徒だけだつた。

水曜日の五時間目は化学だ。他のみんなはすでに移動していつたのだろう。残つていた生徒たちも化学の教材を抱え、すぐに教室から出ていった。

「詩織はまだかな?」

「うーん。時間ないのに……何やつてんだか?」

詩織が戻ってきたときには、授業開始まであと一分しかなかつた。

「ごめん。遅くなつちやつて」

「いいから、ほら、教材出しどいたから。行くよ」

三人はバタバタと足音を響かせて化学室まで走つたが、走つている間に開始のベルは鳴り響いた。化学の授業に遅刻したのは初めてだ。ひとりではないものの、沙帆子は遅刻に厳しい佐原が怖くて、びくびくしつつ、千里と詩織のあとから教室に入つた。

「遅れてもすみません」

先頭にいる千里が頭を下げ、沙帆子は急いで千里の横に並び、「すみません」と頭を下げた。

詩織は千里の反対側に並び、無言でペコペこと頭を下げている。

「飯沢、江藤……それと榎原。遅刻だ」

佐原に名を呼ばれ、沙帆子の胸に苦いものが湧き上がつた。

「早く席に着け」

ぬくもりの感じられない佐原の声に、沙帆子は心を冷やしつつ自分の席についた。

化学室では、二年になつた当初から席替えがなく、ずっと出席番号順に座つてゐる。出席番号が近い三人は同じグループで一斑だ。沙帆子の真向かいが出席番号一番の男子で、彼の隣に千里、そして詩織が座つてゐる。沙帆子の右隣には男子がふたりいる。

すぐに授業が始まつた。

白衣を着た佐原……彼の低い声が、教室内に響く。

少し伸びすぎた前髪……前髪に隠れた瞳……きゅつと引き締めた口元……そして、白衣の左のポケットに突つ込まれた手……。白衣の前がはだけて、すらりと伸びた長い脚が見え隠れする。

胸が苦しくなつた。

もうすぐこの声も聞けなくなるし……顔も姿も見られなくなるのだ。

佐原には恋人がいるのだろうか？ 彼は今日、恋人からチヨコをもらつたのだろうか？ それともこれからもらうのだろうか？ どんなチヨコとプレゼントをもらうのだろうか？

見も知らぬ佐原の恋人の影が、沙帆子を苦しめる。

「榎原さん？」

右側に座つてゐる男子生徒から声をかけられ、沙帆子は顔を上げた。

「君、顔色悪いぞ。気分悪いんじゃね？」

確かに気分が悪かつた。吐き気がする。このところ、ろくに眠つていなかつたせいだ。

そこに精神的打撃が加味されたせい……

「沙帆子、大丈夫？」

沙帆子は千里と詩織に目を向けた。ふたりともひどく心配そうに、沙帆子を見つめていた。

「大丈夫か？ 榎原」

佐原の声に沙帆子はぎよつとして顔を上げた。

大きな手のひらが伸びてきて、沙帆子の額を覆い、彼女は声を失くした。

せ、先生の手が、手のひらが……いま、いま、わたしのおでこに、ふ、触れた。

「冷たいな。貧血かもしれない。保健室に行つたほうが……」

「保健室に行つても、たぶん、ベッド空いてませんよ」

ちやかすように男子生徒が言つた。

「どうしてわかる?」

「先生、保健室の実態知らないんですか?」

「実態?」

「気分が悪くなるやつって、この時間、すっげえ多いんですよ」

「仮病ってことか? そんなやつら、追い出せばいいことだろ?」

「だって先生、そんなの見分けられないしょ?」

「わ、わたし、大丈夫です」

なんとか背筋を伸ばした沙帆子は、自分に集まっている視線を避けて目を伏せた。

「沙帆子?」

不安そうな千里の呼びかけに、沙帆子は大丈夫という意味を込めて小さく頷いたものの、顔や首筋に嫌な汗が滲み出てくる。

「大丈夫そうには見えないぞ。それなら、こっちで休め」

その言葉と同時に佐原が腕を伸ばしてきた。次の瞬間、沙帆子は信じられないことに、彼に抱えられるようにして立つていた。

ヒューヒューという、こういう場につきものの冷やかしの声が上がった。

佐原は化学室の隣にある彼専用の部屋に、沙帆子を連れていった。

もちろん佐原の部屋に入るなんて初めてだ。

「先生、あの、す、すみません」

促されるままソファに腰かけた沙帆子は、申し訳なさを込めて頭を下げた。

「具合が悪いんだから、仕方がないだろう」

不機嫌さが声に現れているようで、沙帆子は迷惑をかけていることに泣きたくなつた。

「気分が良くなるまで、このソファで寝てろ。保健室のベッドに比べたら、寝心地は良くないだろうけどな」

そつけない言葉に、沙帆子は唇を噛み締めながら頷いた。

かすかに煙草の匂いが感じられるものの、咳き込むほどではなく、それが少し意外だった。膝にふわりと白いものがかけられ、驚いた沙帆子は佐原に目を向けた。

白いものは、佐原の白衣だった。

「先生、ごめんなさい」

「授業に行く」

沙帆子の謝罪など取り合はず、佐原はきびきびした声で言い、部屋から出していく。

彼の白衣を両手で握り締めた沙帆子は、部屋を出てゆく佐原を見送った。

パタンとドアが閉まり、ひとりになつたことにはっとして、沙帆子はソファに横になつた。

佐原先生の白衣……

こんな風に手にしてるなんて……それも、佐原先生の部屋で……

佐原の白衣に身を包んでいる幸運に、心が喜びで満ちたが、ふいに切なさに変わつた。

沙帆子は白衣を顔までかぶり、目を閉じた。

煙草の匂いがほんのちょっとぴりする。けれど吐き気など感じないし、それどころか爽やかな香りがした。

部屋はエアコンが入っているらしく、適度な温度でほかほかと温かかった。睡眠不足と具合の悪さが混ざり合い、沙帆子は次第に眠りへと吸い込まれていった。

佐原の香りと、彼の白衣に包まれているしわせな自分を噛み締めながら……

4 冷たい手のひら

眠りの中で、コンコンという音が響き、沙帆子はうつすら目を開けた。

目の前に佐原の顔があり、一瞬にして沙帆子は目が覚めた。

「あ……」

小さな声を上げた途端、佐原の手で口を塞がれた。

沙帆子はびっくりして目を見開いた。

またコンコンという音がし、佐原が口の前で、人差し指を立てた。

声を出すなどいうことらしい。

ノックの音はもうしなくなつた。佐原は足音をしのばせながらドアに近づくと、耳を寄せて外の

様子を窺い、足音を立てぬよう用心しながら戻つてきた。
「どうやら行つたらしい」

沙帆子に顔を近づけ、ささやくような声で佐原が言つた。

「どうしたんですか？」

沙帆子もささやきで問いを返した。

「いや。……訪問者が多くて……」

訪問者？

彼女は、遅れて佐原の言葉の意味を理解した。訪問者とは、チヨコを携えてくる女生徒のことなのではないだろうか？

「氣分は良くなつたか？」

「は、はい。なんとか。すみませんでした。あの授業は？」

「もう終わつてる。すでに放課後だ」

「え。そ、そなんですか？」

「今日は、親に迎えに来てもらえ」

それは無理だ……

「両親は今夜、……あの、デートで……」

沙帆子は口ごもりながら佐原に告げた。

父と母は今日、バレンタインデーで、ふたりきりのディナーを楽しむことになつてゐる。

今頃母は、とびきりのおしゃれをして、待ち合わせの場所に向かっているはずだ。

「デート？」

ひどく意外そうな声に、沙帆子はなんとなく立場がなくて顔をしかめた。

「はい。すみません」

くつくつという笑い声を耳にして、沙帆子は佐原に顔を向けた。

自分の両親のことを笑われていても、あまりお目にかかるない佐原の笑みに、胸がときめく。

「すまない。君の両親は、仲がいいんだな」

「はい。良すぎて困ります」

沙帆子は萎れて言いつつも、憧れの佐原と普通に会話をしている現実に、胸を弾ませていた。

こんな幸運があるだろうか？

気分が悪くなつて迷惑をかけたというのに、嬉しがるなんていけないことだらうが……

「いいじゃないか。仲が悪いよりは」

「そうですね」

「コーヒーでも飲むか？」

「えっ？」

正直、コーヒーは嗜好に合わず飲まない。が、せつかくの佐原の申し出。彼に恋する乙女としては、断るなんて選択肢はない。

「はい。それじゃ、あの、い、いただきます」
「うん」
佐原は真っ白なマグカップを二つ出し、インスタントのコーヒーの粉を入れて、電気ポットからお湯を注いだ。コーヒーのいい香りが部屋に広がった。
「ブラックでいいか？」
「はい？」

「ブラック？　コーヒー初心者にブラック！」

「お、お砂糖ないんですか？」

「案外贅沢言うな。そんなものはここにはない」

確かに……佐原先生が砂糖入りのコーヒーなんて……そんなのイメージじゃない。

「そ、それじゃ、……ブラックでもいいです」

「不承不承って感じだな。飲まなくてもいいぞ」

「いえ。いただきます。せつかく入れていただいたし……。ここはひとつ、挑戦してみます」

挑戦の言葉がウケたらしい。佐原がまたくつくつと笑った。

先生が、わたしに笑ってくれてる。

胸がジーンとした。

差し出されたカップを受け取った沙帆子の隣に、佐原はためらうことなく座ってきた。憧れの教師と並んで座っている現実に、沙帆子は心の中でうおーっと雄叫びを上げた。

佐原が座っている側の自分の身体は、妙に敏感になつたようで、熱は感じるし、ジンジンする。そんな沙帆子に相反して、佐原はいつもと同じ、顔色ひとつ変えぬクールさだ。コーヒーカップを口に運ぶ佐原を、彼女は気づかれぬよう、そつと盗み見た。

す、素敵すぎる……

このままでは、心臓が止まるのではないかと不安になるほど、胸がキューンとした。

これはもう、恋しいひとから無理やり引き離され、親の犠牲となつて引っ越さねばならない、哀れな彼女に対する、神様の最後の思いやりというやつなのかもしれない。

ジーンジーンと胸を疼かせる感覺に氣を取られたまま、沙帆子は手にしたコーヒーカップを無意識に口に運んだ。

「にがつ！」

味覚は正直だった。哀しいほど恋心に感化されない。

「苦いか」

またくつくつと佐原が笑つた。

胸キュンな笑みに、沙帆子は苦みを実感しつつ、甘く頬を染めた。

恋しいひとと、ふたりきりでコーヒーを啜りながら、ソファに並んでいる。夢のようなシチューシヨン。

神様、ありがとう！

嬉しさに涙がこぼれそつた。

彼女は間を持たせるために、苦味を無理やり無視してコーヒーを啜っていたが、ふとポケットの中に入つているチョコの存在を思い出した。

このチョコを食べながらなら、コーヒーの苦さが緩和されて、もつと飲みやすいかもしない。

沙帆子は、ポケットからチョコの箱を取り出した。

「くれるのか？」

一瞬、何を言われたのかわからなかつた。

「もらつとく」

沙帆子が気づいたときは、手にしていたチョコの箱は、佐原の手にあつた。

彼女が言葉もなく見つめている間に、チョコは佐原の白衣のポケットにしまわれた。

コーヒーの苦味よけに、そのチョコを食べようと思つたんですけど……

沙帆子は心の中で佐原に言つた。

行き場を失くしていたチョコは、なんでか受け取つて欲しかつたひとに渡つてしまつた。

呆然としている沙帆子を尻目に、佐原はもくもくとコーヒーを飲んでいる。

いま、チョコ……先生、受け取つたよね？

もらつとくつて……

わたしが、先生にチョコを渡そうとしたんだと思つたのかな？

わたしのことを可哀想に思つたのだろうか？

それですんなり受け取つてくれたのだろうか？

つ、つまり……わたしの恋心は……先生に知られてしまつたということ?

沙帆子はドギマギし、コーヒーをごくんと飲み込んだ。

苦味はすっかり飛んでいた。

「無理しなくていいぞ」

「えつ?」

「顔が赤いな。熱でも出てきたんじゃないのか?」

佐原の手のひらが、沙帆子の額をやさしく覆つた。手のひらは冷たくて気持ち良かつたが、彼女の心臓は、破裂しそうなほど胸の中で暴れまわり始めた。沙帆子は苦しさに胸を押された。

「おい。榎原、お前、大丈夫か?」

「違うんです。いや、違わないけど……違うんです」

「はあ?」

佐原から怪訝な眼差しを向けられ、沙帆子はしゅるしゅるとしぶんだ。

5 慰めの対戦

「あの、ここは?」

車から降りた沙帆子は、五階建ての白っぽい外壁のマンションを、戸惑い顔で見上げつつ佐原に

おごってくれるというから、レストランみたいなお店に行くものと思ったのに……

「俺の家」

「先生の? いいところにお住まいですね」

沙帆子は、マンションの目と鼻の先にある、明るい光を放つている大型スーパーを見つめながら言つた。

「便利だぞ。あのスーパーがあるから、ここに決めたんだ」

「でも、学校は遠いですね」

「ああ。近くないほうがいい。買い物に行つて、生徒にバッタリ出くわしたりしたくないからな」

「そんなものですか?」

「プライベートは守りたい」

「そんなものですか?」

沙帆子は同じ言葉を繰り返し、佐原のあとについていった。

佐原の部屋は、一階の一一番端だった。マンションの正面玄関を通らなくても、駐車場のほうから直接マンションの外通路に入れるようになつていて、部屋が端の佐原にどつては便利な造りだ。

彼女は少々気後れしつつ、靴を脱いで部屋に上がらせてもらった。黒で統一された家具と、白い壁とのコントラストがいい感じだった。独身の男性の部屋に入ったことなどないのだが、男の一人

暮らしにしては、まづまづ片付いているほうではないだろうか。

生活感をほどよく感じさせる程度に散らかっていたりするところなど、かえって好感が持てた。テレビの近くに、ゲーム機が置いてあるのを見て、沙帆子は意外に思つた。

「先生、テレビゲームとかするんですね？」

「ああ。けつこう好きだけど……悪いか？」

凄むように言われて、沙帆子はブンブンと手を振つた。

「そんなこと。ただ、イメージと違うなって」

「俺に、いつたいどんなイメージを持つてるんだ？」

「な、なんか……たとえば、その……薄暗いバーとかで、お酒のグラスなんか傾けて、ものも言わずに煙草ふかしてる。……みたいな？」

「まあ……近いものはあるな」

佐原が苦笑し、沙帆子は馴染みとなつた胸キュンに襲われた。

「榎原、お前は？ こういうゲームは好きじゃないのか？」

「好きです。これ、やつてみたいです。この機種持つてなくて……。佐原先生、どんなゲームソフト持つてるんですか？」

沙帆子は、ゲーム機の側に行き、その場にしゃがみこんだ。佐原も歩み寄つてきて、彼女の側に屈んできた。

「いろいろ買つたけど……」

佐原は、なんの気なしのようだが、ふたりの身体はかなり接触している。

「スポーツのこれ、かなりはまるぞ」

「あ。テ、テニスとか。やつてみたいです」

佐原の身体を滅茶苦茶意識していることを気づかれないよう、沙帆子は高ぶつた気持ちを必死に落ち着かせながら、声をうわずらせないように慎重に答えた。

「あとでやるか？」

その言葉に沙帆子の心は躍つた。

な、なんと嬉しい申し出を……

佐原先生と仲良くテレビゲームができるなんて、それも先生の住まいで……

しあわせすぎて、これつて現実なのだろうかと、疑いたくなつてきた。

「対戦相手はずつとコンピューターだったから、楽しみだな。それで？ 榎原、お前、何が食べたい？」

「先生、お料理、作れるんですか？」

「いや、全然。そのスーパー行つて、適当に買つてくるつもりだけど……」

「それなら、ファミレスとかでよかつたのに」

「お前の具合が良くなさそうだったから……外食よりいいかと思つたんだが？」

「先生って」

「なんだ？」

「やさしいんですね」

心からの褒め言葉だつたのに、佐原は気に食わなかつたようだつた。
いい雰囲気だつたのに、沙帆子は佐原に睨まれて小さくなつた。

「適当に買つてくるぞ」

佐原は投げ捨てるように言うと、さつさと玄関に向かい、振り向きもせずに出ていった。

ひとりで留守番をしている間、沙帆子は身の置きどころがなく、一度トイレを拝借した以外、ずっとソファに座り込んでいた。あちこち探検したい気持ちは強かつたが、せつかく厚意でいさせてもらつているのに、佐原がいない間に部屋の中をうろつくなんて、そんな失礼なことをすべきではない。三十分くらい過ぎた頃、佐原は両手に荷物をぶらさげて戻ってきた。

ドアが開く音を聞きつけた沙帆子は、すぐさま玄関に飛んでいった。

「先生、お帰りなさい」

戻つてきてくれたことがただ嬉しくて、沙帆子は喜びいっぱいで佐原を迎えた。

「……あ、ああ」

沙帆子の手放しの歓迎に戸惑つたのか、それとも面食らつたのか、佐原は口ごもつた返事をした。荷物を受け取ろうとすでに手を伸ばして掴んでいた沙帆子は、顔をしかめている佐原の表情を見て、慌てて手を引いた。

「あ、す、すみません」

「なんで謝る？」

「な、なんでつて……先生、顔しかめてたから……」

「悪かつたな。もともとこんな顔だ」

「そ、そんなことないです」

「ほら」

佐原は会話を切り上げ、荷物のひとつを沙帆子に持たせ、さつさと居間にに向かつた。

夕食のメニューは、様々だつた。カツサンドに寿司に、お惣菜。ペットボトルのお茶にオレンジジュース、砂糖の入つたコーヒーもあつた。それにデザートも……

「わあっ、美味しそう」

「どうか。それじゃ食うか」

そう口にした佐原は、すぐに食べ始めた。

彼女は割り箸を取り、食べている佐原にチラチラと視線を向けつつ、いなりずしを頬張つた。

こんなことが現実になるとは……信じられない……

片思いの相手……手の届かない高嶺の花のはずの先生と、先生の住まいで先生がわたしのために買つてきてくれたものを一緒に食べてゐるなんて……

佐原は、沙帆子が遠慮しないようにと考えてか、彼女にあれこれ食べ物を差し出してくれた。

沙帆子はそのたびにありがたく受け取り、口に入れた。

「気分が悪いのも、良くなつたみたいだな」

パクパク食べているところに、佐原から笑いまじりの声をかけられ、沙帆子は頬を染めた。

ガ、ガツツキすぎた？

恋わざらいの女の子は、胸がいっぱいで、恋しい相手の前では食べられないのが定番なのに……といまさらながらに思う。

「は、はい。今日はご迷惑をかけてしまって、すみませんでした。い、いま悩みがあつて……それでここ最近眠れなくて……それに食欲もなくて……」

そう言つた途端、沙帆子は顔が燃えた。

これだけ食べておいて、食欲がないだなんて……

「悩みごと？ 何かあつたのか？」

思いやりか、佐原は彼女の食欲ない発言に触れてこなかつた。そのせいで沙帆子はなおさら恥ずかしさが増したが、佐原から気遣わしそうに聞かれて、一気に気持ちが高ぶつた。

「わたし……実は……ひつ……」

突然、涙がぽろぽろ出てきた。

「ひつ……ひつ……」

胸が苦しくて、どうしても言葉が続けられない。

「お、おい。榎原、急にどうしたんだ？」

沙帆子は泣きながら佐原に顔を向けた。佐原の顔を見つめていると、感情はさらに高ぶつてゆく。

「引っ越さなくちゃ……な、ならないんです。が、学校も、転校しなくちゃならなくて……」「転校？」

ポケットから取り出したハンカチを目に当てて、沙帆子はこくりと頷いた。

「父が……転勤することになつてしまつて」

「高校、あと一年じゃないか。お父さんには、単身赴任で行つてもらつたらいいだろ」

「母は、父と離れて暮らすようなこと、絶対にしません」

「……仲が良すぎるのも、困つたもんだな」

沙帆子は同意を得られて大きく頷いた。

「お前、残りたいんだろ？ 一人暮らしさせてもらつてはどうだ？」

「いまのアパートは引き払うつて。お金が大変だからつて……」

「まあ。それは家庭の事情だらうからな。そとか……仕方がないな」

沙帆子は弱々しく頷いた。ひとときの激情が去り、涙は止まつたが、沙帆子は肩を落として俯いた。しぼんでいる彼女の肩を、佐原はポンポンと元気付けるように叩いてきた。

「ゲームでもやるか？ 気分転換に」

沙帆子は顔を上げて佐原を見つめた。

佐原の表情には彼女に対する思いやりがある。それを感じて、沙帆子は少し元気になれた。

「はい。やります」

せつかく佐原と一緒にいるのに、めそめそばかりしていたら、もつたいない。

く、くそつ！ こんの野郎。

数十分後、沙帆子は恋焦がれている相手に対して、心の中で罵罵雜言を吐いていた。佐原はゲームに熱中するたちらしく、ゲームがそれほどまくない沙帆子を、おとなげなくコテンパンにのして喜んだ。

佐原らしいと言えるのかもしぬなかつたが、そのクールな喜びようが、イラつくほど癪にさわる。沙帆子の勝負熱はカツカと燃え上がつた。

6 ありがたい申し出

「おい。榎原、お前の携帯じゃないのか？ 鳴つてるの」

「えつ」

沙帆子は握っていたコントローラーを放して、通学鞄のところにすっ飛んでいった。『ハウス』の文字！

沙帆子は心の中で悲鳴を上げた。

いくぶん腰が抜け気味に、床にぺたんと座り込んだ彼女は、慌てふためいて携帯に出た。

「は、はいつ」

「沙帆子。あなた、こんな時間まで、いつたいどこにいるの？」

吼えるような声で言われ、沙帆子はびくんと跳ねた。

「え。えつと？」

時計を探して部屋を見回したが、時計が見当たらない。

「佐原先生、いま何時なんですか？」

「九時……過ぎてるな」

「ええーつ！」

沙帆子はびっくりして叫んだ。時間を口にした佐原自身、驚いているようだつた。どうやら、ふたりしてゲームに熱中しすぎたらしい。

「沙帆子、いつたい？ ……あなた、佐原先生つて、どういうことなのよつ！」

母親の声が頭に、キーンと響いた。

沙帆子は頭のてっぺんに穴が開いたような気がして、手のひらで押された。

「そ、それが……先生のところでご飯食べて……パパとママ、遅くなるって思つて、テレビゲームしてたら、知らないうちに時間が過ぎててえ」

沙帆子は半泣きで答えた。

自分が何を言つているのかもわからないくらい、頭の中はごちゃごちゃになつていた。

「榎原、貸せ」

しどろもどろになつてゐる沙帆子から携帯をもぎ取り、佐原は耳に当てた。

彼は沙帆子の隣に、膝立ちになつて背筋を伸ばした。

「はじめまして。佐原啓史と申します。お嬢さんの副担任ですが」

沙帆子は、佐原の手首を両手で掴み、携帯に耳を押しつけた。

「まああつ、おつどろいちゃつたわあ。そーうだつたのお?」

興奮した母の声はやたら大きく、ちゃんと聞き取れた。母親の後ろで、父親が派手に喚いている声が聞こえるが、こちらは何を言つてているのかわからない。

しかし……知らなかつたって？ ……どういう意味なのだ？

沙帆子は、もつとよく聞こえるように、さらにぎゅっと耳を押し当てた。

「これからお宅にお連れしますので、ご心配なさらずに……」

「びっくりしちゃいましたけど、そうだつたのね……」

佐原が携帯から沙帆子を引き離そうとする。彼女は必死に抗い、携帯に取り縋つた。

「お、おい。そんな風にぶら下がつてくるな、重いぞ。あとで話すから」

叱るように言われて、沙帆子は唇を突き出した。

「だ、だつてえ……」

「何、揉めてるのよ？」

母の明るい笑い声が聞こえ、沙帆子と佐原はピタリと諍いを止めた。

「だーから、沙帆子つてば、ここんところまつたくぜんぜん元気なかつたのねえ。ならそと、言つてくれればいいのにい……。幸弘さん、う、る、さ、いつ」

沙帆子は眉を寄せて、佐原と目を合わさせた。母の言つている意味が彼女にはわからなかつた。沙

帆子の元気がなかつたのは引越しのせいで。それは母も知つていて。
「あの……ママ？」

沙帆子は母親に問いかけた。だが母は、沙帆子には答えなかつた。
「それじや、佐原さん」

「はい」

「娘を早く送つてきてくださいね。お待ちしますう」

母の後ろで相変わらず父の喚きが聞こえるなか、携帯は切れた。

眉をしかめて携帯に耳を当てていた沙帆子は、佐原とまた目を合わせ、いまさらながらにそのあまりの近さにぎょつとして目を剥いた。頬と頬が、ほとんどくつついでいるような状態だ。

彼の腕をぎゅっと掴んでいる自分の手に驚き、彼女はパッと離した。
「す、すみません。母が何を言つてるのか、知りたくて……つ、つい」

「送つてく」

佐原がすつと立ち上がつた。ふたりの距離が離れ、佐原の冷たそうな表情に、沙帆子は自分の立場を思い知り、ひどく恐縮した気持ちに囚われた。

「はい。ご迷惑かけて、本当にすみません」

沙帆子はすごすごと佐原に続いて玄関に向かい、部屋をあとにした。

「榎原」

車で走りながら佐原が話しかけてきた。

「はい」

「お前、残りたいんだろう?」

「あ……はい。それはもう」

「一人暮らしになつていいのか? お前、ひとりきりで生活することになるんだぞ」

「転校するよりいいです!」

思いの丈たけをぶつけるように、彼女は佐原に言った。

「そうか」

何を考えているのか、佐原はしばらく黙り込んだ。

「俺が、君の両親を説得してみよう。なんとか残してくださいるように……」

沙帆子は目を丸くし、佐原の横顔をまじまじと見つめた。

そんなありがたすぎる申し出を、佐原先生がしてくれるだなんて……

「ほ、本当ですか? 先生が説得してくれたら、許してもらえるだなんて……

「その代わり、これが成功したら、榎原お前、俺に借りができるぞ」

「借り、ですか?」

「ああ」

沙帆子は佐原の横顔に向けて大きく頷いた。

「わたし、なんつでもやります」

「その言葉、忘れるなよ」

佐原が、くつと笑った。なんだか背筋に寒気が走るような、悪魔的な笑みだつた。

「あ、あのぉ……」

「家の方向、早め早めに教えるよ、榎原」

「あ。はい。もう少し行くと大きな交差点があるので、そこを左です」

「了解」

「あ、いまの笑い、な、なんかひどく怖かつたんだけど……見間違いとかだらうか? すでにいつもどおりのクールな佐原の横顔をチラチラ見つつ、沙帆子は頭を捻ひねつた。

7 夢の中の現実

遅くなつたことに対して、かなりの小言を食らうものと覚悟していたのに、副担任の佐原が一緒にだからか、顔を見てすぐに叱られることはなかつた。

「佐原啓史です。はじめまして」

沙帆子の父と母を前にして、佐原は礼儀正しく頭を下げた。

父はあからさまなふくれつ面で佐原を睨んでいる。まるでふてくされた子どものようだ。

パパつてば……

沙帆子はため息をついた。

父には、歳相応の貫禄というものが、欠如しているように思えてならない。

「すみません。私がついていながら、お嬢さんをお返しするのが遅くなってしまって」

「いえいえ。紅茶でよろしいかしら。すぐに入りますからね。幸弘さん、ちゃんと、佐原さんのお相手していくね」

「わかってるよ。芙美子ちゃん」

佐原が少し身動きした。視線を向けてみると、まるで苦いものを飲み込んだかのように、佐原は顔をしかめていた。

どうしたんですか？

沙帆子は佐原の目を覗き込み、無言で問いかけた。佐原はなんでもないというように、かすかに首を横に振った。

「それで……その……いつから」

「いつからって？」

質問の意味がわからず、彼女は父に聞き返した。

「だから、こい……う、こほん。佐原君だつたか……君はほんとうに教師なのか？」

「はい」

「パパつてば、失礼よ！」

嘘なんかつくわけないのに……父ときたら、なんでそんなことを疑うのだ。

「それで、いつからなんだ？」

「いつから？」

「あ、ああ。去年の四月からよ。先生、いま二十三歳なの」

「そ、そ、うか。四月から……もうすぐ一年になるんだな」

「はい。経験も浅くてまだまだ未熟ですが、色々と楽しませてもらっています」

沙帆子は佐原の言葉に同意し、笑みを浮かべてうんうんと頷きながら口を開いた。

「未熟なんてこと。いつもとつても楽しいです」

佐原の授業は、沙帆子にとつてもう最高に楽しい時間だ。講義は佐原の声を聞けてしあわせだし、実験もとつても面白い。

「うおっ」

なぜか突然、変な叫びを上げた父はのけぞるように身を引いた。

「はい、お待たせえ。紅茶、どうぞお」

明るい抑揚をつけて、母はみんなの前にティーカップを置いてゆく。

「実は、お願ひがあるのですが

佐原が表情を改めてそう言つた途端、のけぞつたままの父は、なぜか片腕で防御の姿勢をとり、「ひ」と叫んだ。

「幸弘さんつてば。もう駄目ねえ。こういうときは、父親として、もつとしっかりしてくれなくちゃ」

美美子の小言を食らった幸弘は、顔をかすかに赤らめ、元の位置にすごすごと戻ってきた。

「美美子ちゃん、ごめん」

「さあさあ、佐原さん、お話、続けてちょうどいい」

「あ。はい。実は……」

父と母に視線を向け、佐原は話を切り出した。

「彼女から引越しのことを聞きました。ですが、高校もあと一年のことです。なんとか彼女を、このままこちらにいさせていただけないものかと思いまして」

佐原は沙帆子と目を合わせ、彼女の意志の固さを確認するかのように見つめてきた。

沙帆子はそれに応え、佐原に大きな頷きを返した。

両親の方へ顔を戻した佐原は、少し緊張を感じさせる凜々しい顔で口を開いた。

「彼女もそれを望んでいます。ぜひとも、お願ひしたいのですが」

母が沙帆子に目を向けてきた。母の目を見て、沙帆子は無意識に姿勢を正していた。

「沙帆子、真剣な気持ちなのね？」

「は、はい」

「生半可な気持ちじゃないわね？」

「はい」

「あとで泣き言言つても、聞きませんからね。それくらいの覚悟は持つてちょうどいい。いい？」

「もちろん。わたし、絶対泣き言なんか言わない。ちゃんとやつてゆける自信あるもの」

「はい」

「条件がひとつあるの。その条件を呑んでいただけない限り、この話はなかつたことにさせていた

だくわ」

「条件？ いつたいなんですか？」

「娘はまだ高校二年生なんです。きつちりと届けを出していただかないことには、やはり、親として許すわけにはいかないわ。それはわかっていていただけるでしょう？」

「届け？ ですか」

珍しく戸惑ったように佐原が言つた。沙帆子だって、届けってのが、なんのことやらわからない。

「ええ。いなげけ許婚いなげけでも、まあいいんだけど。若氣のいたりで、できちゃつたりするとねえ。できちゃつたから、仕方なく結婚してもらったなんて状況、女親のわたしとしては、すつごい嫌なわけ」

沙帆子は首をちよっぴり捻つて、母の言葉を理解しようと努めた。

「若氣のいたり？ いやその前に……許婚？ できちゃつた？ 何が？」

「仕方なく結婚？」

「け、結婚？」

飛び上がらんばかりに沙帆子は叫んだ。

「もちろんよ。一緒に暮らすんなら、世間様にちゃんと通用するようにしておかないと」「ママ、ちょっと。な、なんか……なんか……」

このありえない誤解を解くべく、テーブルに身を乗り出して必死に言葉を口にしようとしていた沙帆子は、ぐいっと襟首を掴まれて、佐原のほうへ引き戻された。

首を絞められて喉が詰まつた沙帆子は、ゴホゴホと咳き込んだ。

「な、何を……」

「わかりました。おっしゃるとおりだと思います」

神妙そうな顔で、佐原は頷いた。

芙美子が笑みを見せて頷き返してきた。

「わかつていただけたと思ってたわ。娘との関係をこれでチャラにするなんておっしゃつてたら……。ここから無事には帰れなかつたわよ、あなた」

娘との関係をチャラ？ チャラってなんなのだ？ チャラにする関係なんて、佐原との間に一ミリだって築けてないし。

「し、しかし……いま……どんでもない話になつてないか？」

「マ、ママ、あの……」

「脅してはいけないわよ。佐原さんには大人として、すべてをきちんとしていただきたいだけ。やることやつといて、いまさら逃げようだなんて。ねえ、佐原さん？」

やることやつといて？ つてのは……いつたいなんのことなのだ？

なのに佐原は、芙美子の言葉のすべてを理解しているようだし、まったく戸惑いを見せていない。「おっしゃるとおりです。それで、私は今後どうすれば？」

「そうね。わたしたちの引越しは三月の終わり頃つてことになつてゐる。それまでに婚姻届を出して……披露宴はまあ、先でも良いけど……それらしい式は挙げましよう。ウエディングドレスはわたしのいい？」 沙帆子

呆然としていた沙帆子は、話を振られても、何も言葉を返せなかつた。

「……いいんじゃないでしょうか。それで」

沙帆子の代わりに佐原が答えた。もつとしつかりしろとも言いたいのか、佐原は沙帆子を冷たく睨む。

「あなたのは貸衣装を頼む必要があるわね。それなりにちゃんとして欲しいし。ね、幸弘さん、この近辺の教会が空いてないか、あとでネットで探してみてちょうだい」

「ああ。まあ……わかつた」

ふてくされたように幸弘は返事をした。

「あ、あのつ」

話に割り込もうとしたが、沙帆子は誰にも相手にしてもうえなかつた。

「この子の荷物は、いつ運べば良いかしら、佐原さん？」

「私のほうは学校が休みであれば、いつでも構いません」

「そう。じゃあ、日柄のいい日についてことで」

「はい」

「あ、あのつ」

必死の呼びかけは、また空振りに終わつた。

「それでは、明日も仕事ですし、彼女も学校がありますから。詳しい話はまだ今度ということで、そろそろお暇しようと思いますが」

「ええ。そうね」

「では」

佐原が立ち上がり、沙帆子は無意識に佐原を見上げた。
何がどうなつたのだ？

結婚がどうとか、母のウエディングドレスがどうとか、荷物を運ぶとか……

彼女は、佐原から肩を叩かれて我に返つた。

へつ？

「沙帆子、玄関まで俺を見送つてくれないのか？」
へつ？ なぜ、呼び捨て……？

佐原をぽかんとして見上げていた沙帆子は、彼の腕で力任せに立ち上がられた。
彼女は腕を掴まれたまま、ぎくしゃくした動作で、佐原と一緒に玄関に向かつた。

へつ？

「しつかりしろ。お前、大丈夫か？」 榎原

「あ……あの。いつたいぜんたい……いま、どういうことに？」

「結婚することになつたみたいだな」

「けつこん……？」

沙帆子は、ぼうつとしつつ口にした。

その言葉に意味がともなわない。

「まあ。これで、転校せずに済むな」

沙帆子は目を見開き、激しく首を振つていた。

転校しないで済むように、結婚？

「せ、先生。そういう問題じや」

「しつ。騒ぐな。変に思われるだろう」

「へ、變つて、變つて……？」

「で、でも。先生。あれ、母は本気ですよ。あれ、冗談とかじや、きっとないんですよ」

「だろうな」

「だろうなつて……いいんですか？ いいんですか？ 本気の結婚なんですよ、このわたしなんか

と……」

「お前、料理できるか？」

「へつ？ できますけど……それが……」

「榎原」

「はい？」

「お前。……この俺との結婚に、なんか文句があるってのか？」

脅すように佐原が迫ってきた。沙帆子は怯えて身を引いた。

「お前、チヨコくれたよな。俺のこと好きなんだろ？」

「そ、それは……それは……」

「まさかと思うが……お前、この俺を、からかっただってのか？」

佐原が、じろりとねめつけてきた。脅しの含まれた凄みのある顔に沙帆子は泡を食い、口をパクパクさせた。

「あ、あれは……もちろん佐原先生に、あ、あ、あげるつもりで……」

頭の中が、三度くらい爆発したような気分だつた。

こんなこと現実であるはずがない。とすれば、沙帆子はいま、どこにいるのだ？

夢の中？

なんとなくそれがしつくりくるような気がしてきた。彼女は眠っているのだ。これは夢の中の出来事。そうに違いない。

「ならなんの問題もないな。それじゃ、俺は帰るから。授業中に気分が悪くなることのないよう、ゆつくり休めよ、榎原、いいな」

「は、はい。おやすみなさい」

沙帆子は機械的に頭を下げた。

「ああ。おやすみ」

冷たいほどそつけなく言い、佐原は姿を消した。

バタンと沙帆子の鼻先でドアが閉じる。

夢の中であつても、佐原のクールさは変わらないようだつた。

母親が呼びかけてくるまで、沙帆子は玄関のドアを呆然と眺めていた。

立ち読みサンプル はここまで

8 自信消滅

朝の目覚めを迎えたものの、ぼうつと霞んだ意識は、なかなかはつきりとした思考を取り戻せなかつた。

まだ眠たい……

眼気を払いのけようとしながら、沙帆子は自分の見慣れた部屋をゆっくりと見回した。

いま何時だろう？

彼女は横を向いて、壁にかけられた時計を見つめた。六時十五分ちょい過ぎだ。あと十分くらいで、目覚ましが鳴る時間。

沙帆子は大きな欠伸をした。眼気を振り払おうとするが、なかなか頭がクリアにならない。